



父

—その死—



幸

田

文

父
—その死— 幸田 文著

昭和二十四年十二月二十日 東京都板橋區板
橋町一〇ノ二四八四 三陽社 山田 博印刷

同月二十五日 東京都千代田區丸ノ内二ノ二
丸ビル五九二區 中央公論社 栗本和夫發行

定價一二〇圓

目次

菅野の記

1

葬送の記

109



あとがき

133

菅野の記

なんにしても、ひどい暑さだつた。それに雨といふものが降らなかつた。あの年の關東のあの暑さは、焦土の暑さだつたと云ふよりほかないものだ、私はいまも思つてゐる。前年の夏だつて暑かつたのだらうが、日本はまだ戦つてゐた。誰の眼にも旗色は悪く、戦争の疲勞と倦怠になげやりになつてゐたとは云へ、それでもみんなそれぞれの親を子弟を砲彈の下に送つてゐ、自分たちもいつ空襲に死ぬかわからない恐怖で、暑さなんぞに負けてはゐられなかつた。終戦が八月十五日、すでに秋の氣が立つてゐた。そして翌二十一年夏、新聞も何十年ぶりの暑さと報じ、實際寒暖計もさう示してゐたらうが、人の氣といふものも暑さに弛緩して反應なく、うだればうだつたなりにふやけてゐた。まつとうの覺悟で起きあがらうとするものには、なほまだしばらくの休養の時間が必要らしくて、もの憂げだつたし、闇屋とそれに類するやからだだけが焼けあとに亂れ騒いでゐた。が、その人たちが一早く建てた住ひといへば、なま

じひに新しいだけなほはじめに見える、こつば小屋でしかなく、それとてもどれだけの数があるといふではなく、焼けた残骸の堆積にくらべて、なんとさみしいものだつたらう。熔け流れたガラス、反つくりかへつた鐵骨、崩れた石。

地上満目の焦土は、いまだに宿火をいだいてゐるかに、もちろんと火のない焰を燃やしてゐ、天上おほぞらいつばいには、くるめく太陽が酷熱を以てのしかかつてゐ、人々は黄色くしなびて頸を垂れ、暑さに負けつ放しに負けて恥かしいとも思はなくなつてゐた。去年も今年も夏はめぐつて來たけれど、あの年の暑さは別だつた。あんなに人がみんな暑さを無氣力に承服したのを見たことはない。焦土の悲しい暑さが、あの年の夏だつた。

私たち父も子も、せんから暑さに弱いたちだつた。毎年七月八月を過すための、二人ともきまつた處方箋を持つて、それにしたがつて暮した。父は悠々と好む道に遊んだ。若いときは釣に讀書に、晩年は専ら讀書に費した。私は好まざる道に努力した。よぐれた衣類を洗つたり張つたり、ことに縫ふことは最も好まないしごとだつたから、たゞ一刻も早く仕上げるといふことを楽しみにし

て努力した。父は夕風に晩酌を楽しみ、子は蚊帳に安眠を貪つた。これが父と子の定例の對暑法だつた。その年、父はもう讀書ができなくなつてゐた。臥たきりではあり、視力がはなはだしく衰へ、眼鏡をかけたうへ更に精巧な擴大鏡を使はなくては見えず、割合に重いそのレンズを上下して讀むことは、腕がさきに疲れてたまらないらしく、あれほど好きで間がな暇がな讀んでゐた人が、その樂しみを投げて、まじりまじりとしてゐた。私は私で、かつて經驗したこのないからだつきになつてゐた。どうにもからだがきびきびと動かない。たまに少し調子よく乗つて來るときがあつても、自分の能力の極限まで行かないうちに、突然妙な不安に襲はれて、——さう、襲はれるといふのがびつたりあてはまる詞だつた——集中しつくしてする状態になれなかつた。

はじめは考へても見まはしても何の不安なのか、まるで見當もつかず、どうしてさう幾度も變な氣もちになるのか不氣味だつた。張板にかゝんだまゝ、はつとどきどきしたり、虎斑のやうになつてじりじり乾いて行く布を見てゐるとき急にこはいやうに居しかんだり、そんな時うろたへて立たうとすると眼がく

らんだ。ある時ふと、その状態になつてゐる間は心臓が非常に壓力をもつて躍つてゐるのに心づいた。不安から亂脈になるのではなく、いきなり心臓が躍りだして、直後に不安に襲はれるもののやうであつた。精神の云ふことを聽かないからだのけだるさも、故のない不安の原因も、心臓が弱くなつたせゐかと思へば一應はわかつたやうでもあるが、氣もちはさつぱりとかたづくわけには行かなく、舌うちのしたいやうな、いらいらしさを持てあますばかりだつた。永年の對暑法は、父子ともに崩されてゐた。

そのうへ住ひは手狭だつた。恐るべき住宅難のさなかだつたから、二疊・四疊半・八疊三間の家は、父・子・孫の三人にはゆとりのある廣さのものと云はれる相場であり、人々の好意によつて借り得た家だつたけれど、明るいかはりに庇は深くなく、瓦は葺いてあつても檐は高いと云へなかつた。東は青々と陸稻の畑にひらけて、猛烈な朝日を遮るものはなく、南北の兩隣は迫つて風を塞ぎ、西を受けた臺處は蒸れてものの臭ひを沸きたゝせた。それでも一軒一家の住宅は當時奇蹟のやうなありがたさで、父は何にも不平を云はず、私も間借り

炊事の煩はしさから遁れたことを感謝してゐたし、孫も住み馴れた家の焼けたことに執著を残してゐなかつた。こゝは謂はゆる借家普請であつた。それまで住んでゐた人も戦争におびえて家を愛するだけの餘裕ある住みかたをしなかつたのだらうし、私たちにしても人手も物も得られなかつた。

雨が漏つて、そのたびに病床を引きずりまはさなければならなくても、父は黙つて笑つてゐる。疊に大穴が明いてゐても、「わたしのためなら寝てゐるんだからかまはないよ。それより早く自分のうちを調へる才覺を積んだ方がいい」と平氣でゐた。が、たゞ一ツ、天井だけを父は、ほゝうと驚き、「氣もちのいゝものぢやないな」と云つた。それはベニヤ板か厚ボールか、それへ木目を印刷した紙を張つたものらしい。鶉を模したやうな茶色のぼてぼてした木目の模様は、八疊の天井いつばい、どのこまもどのこまも皆同じ柄でつまつてゐた。父は向嶋蝸牛庵を講談社に賣つて以來、住ひに恵まれず、私は新聞廣告を頼り、傳手に縋つて、辛抱強く日課のやうに何十軒の借家や賣家を見てまはつたが、遂にあゝした天井のあることを知らなかつた。臥たつきりの父には、こ

たへた風景だつたとおもふ。

空襲以來、父は臥たきりになつてしまつた。だから足かけ三年まる二年餘、起つことができない床にゐた。人手は拂底であり、女中奉公人など求めても所詮むだは知れてゐたが、なにより私を控へさせてしまつたのは若い女の人たちの氣風だつた。戦争中からさういふ傾向が著しく、敗戦後は加速度でこの年頃の人たちが變つて行つてゐた。野放圖もない臆面なさ、粗暴な動作は殆どめど知らずに見え、よしんば破格の給料を以て迎へたにしても、父の癩癰、私の意固地、通學に餘暇のない孫の三人がつくり成してゐる、一種のイズムのある家庭では、到底うまく行くどころか悶著煩累のほかに何がありよう筈はなかつた。七月、學校は暑中休暇に入つた。私はそれを待つてゐた。學期中は朝食を濟ませるとすぐ出かけてしまはなければ間にあはない玉子の手が、休みのあひだ中は私の援けをしてもらへるからである。私は玉子と一週間交替で、炊事とみとりを代りあつてしてゐた。

ながい昔から父には生活の習慣があつた。朝、眼覺めていつまで床にぐづつ

いてゐたためしがない。夏冬と違ふにしても眼の覺める時間はほど一定してゐて、前夜すこし酒を過しても、それで翌朝ひどい朝寢をすることもまあ無いし、眼が冴えて夜なかの讀書などしてゐても、大概起きる時間には自然覺めるらしかった。起きるとすぐ手水、座に着いて一服、目の前で煎れさせた焙じ茶一杯、新聞・書信に目を通して朝食、ときまつてゐる。臥てゐてもその通り、眼が覺めればすぐに雨戸を拂つて、手早く部屋の掃除をする。著かへこそしない寢卷のまゝだけれど、助け起せば床の上にすわつて、ひとりで顔も洗ひ口も漱ぐ。二人の手ならば一人がそんな身のまはりの小間用をしてゐるうち、片方は煙草盆の火を入れ、茶を焙じ、朝食を用意し、一人が給仕してゐる間に一人は近處の牧場——と云つても五六丁はある處へ、その朝搾りたての牛乳を取りに、とつとと往復する。お膳がさがつて來るとひきちがへに、中溫にした牛乳を出す。茶を飲んで更に一服、暫時してお經を誦む。要品である。これは延子叔母が亡くなつてからの、父の朝のならばしになつてゐた。お經が濟めば手を添へて横にしてあげる。

これだけのことだから一人手できないことはないけれど、掃除をしてゐる間に洗面の支度をしたり、一度に二ツはできないとすれば、一ツ一ツのことはどうしても合間がある、それを父は無類にじれつたがつた。いきほひ丁寧なしごとがしてゐられず、用の濟んだ手水の道具を廊下に押しだしておいたなり、あわてゝ煙草盆に火を入れて出さなくてはならない。父の氣に入る灰の盛りやう、煙管の掃除も知らないわけではないけれど、まづ第一に間拍子よく間合はせて行かなくては機嫌が悪くなつてしまつた。指のさきへ力が入りきらないやうなげだるさと、集中できなくなつた神経では、とても父の歩度について行くことが苦しかつた。氣先を悪くさせまいとすればするほど不手際をやつた。父の手もとの確かでないのを氣づかひつゝ、給仕の盆のふちで茶碗をひつくり返したり、遅くなつたと急ききつて、コップのふちから牛乳を溢れさせたり、一體いままでそんなに不調法ではなかつたのに、その夏はまつたく不出來だつた。玉子の休暇がうれしかつた。やつと、ほつとした感じだつた。

私が臺處の番だつた。玉子がみとりの番で、雨戸を明けて掃除に部屋へはひつて行つたと思ふと、おぢいちやまが血だらけだと、あたふたと聲をひそめて知らせた。これが父を死まで引つばつてしまつたものの、一番はじめの觸れであつた。顔・髻・手・枕・シーツと紅くしてゐたが、父は何も氣づかない様子であり、私も瞬間はつとしたけれど、まさか一大事に尾を曳くとはおもはなかつた。のちに悲しく氣づいた。死は父を奪ふに、なんとふてぶてしくやつて來たことだかと。しよつばなから鮮明な血の彩いろどりをもつて、不敵に面つき出して挑んだことだつた。また思ふ、それは父から生命を剝奪して行つたのではなかつたと。父はもはや抗はなかつたにちがひない、むしろ任せてゐたのではなからうか。したがつて死は、父から切りとつて奪ふべき何ものもなかつたのだし、何の傷をも與へ得られないほど父は自若としてゐたらう。死の表現は父幸田成行の上に於て確しなとなされたけれど、死の挑戦と慘虐と眩惑とは、實は私に對つてなされてゐたのではなからうか。それなら効果は擧つた。私はいまだに癒えぬ痛恨をのこしてゐる。

生れいづる苦しみといふが、誰が生れいづるときに苦しみをよく云へるだらうか。生みいだす苦しみを人間と動物の女性が知つてゐるだけではなからうか。生れいづる苦しみを誰も知つてゐないやうに、死の苦しみも誰も證據だてゝおちいつた人はないやうだ。死はその人の上になされても、死の苦しみといふものはあるひはその人と最もかゝはり深き生きのこりものに授けられるものではないだらうか。それはたしかに謂はゆる苦しみ死にに死ぬ人もあると聞いてゐる。死が直接にその人から生命を強奪して行くやうにおもへる。すなはち死はその人を目的にして、びたりと相對してゐたかたちと云へないだらうか。死の目的はいろいろだ。死そのものはそのからだの上になされても、目的はよその人に對つてゐるかもしれない。時に七月十一日であつた。あるひは出血は前夜半、やはり正しくは十一日午前と見るべきとおもふ。

一ト通り汚れものの始末をし、平常と變りなく朝食の支度をした。父の表情からは何の異常も不安も發見できなかったが、私は次第次第に畏れが大きくなつて、流しの框をあがるときに足の骨がくすぐつたいやうで、膝が踏みたゝな

かつた。人手を頼まなくてはならない、とにかく土橋さんと呼んで来よう、それだけしか考へられず、玉子に合圖をしておいて、人氣ない路地を走つて行つた。曲り角で、いつも茄子を賣りに来る氣のいゝ百姓のをばさんに出くはした。「どうかしたかよう、血相變へて。」さうだ！ 血相變へてるんだ！ おちつかう。足はとめず、挨拶のかはりにふりかへると、をばさんが籠をしよつて立ちどまつてゐた。

砂道が毎日の照りでぼくぼくに乾いて、下駄を吸ひ込んだ。往還へ出ると砂利が軌んだ。もう息がはずんで駈けられず、それでもできるだけの大腿で、速度を落したくなかつた。一本道をどんどん人の背を抜いて行つた。浴衣の裾が重かつた。片棲を引きあげた。商店はまだおほかた表戸を明けてゐず、魚屋のおかみさんだけが竹箒を持つて道を塞ぐやうに立ちはだかつて、遠くから私を見迎へてゐた。「こんな早く、醫者かよ？」ぎよつと衝かれた。「そだろ？ 自轉車に載せてつてやろかよ！」あゝ、この勘の速さ。さうぢやないのよと云ふかはりに首を掉り、汗がめゝずの這ふやうな感覺を残して鼻の頭へ流れた。京

成電車の驛が見え、ごおつと電車の来る地鳴りがし、私は財布の口を明けながらあせり走つた。電車は下りでなく上りだつた。がっかりして、手が顫へてゐた。

この土地では住んで一年餘になつてゐても、ほとんど父の名は知られてゐなかつた。轉入手續の事務所では家族表を見て、稼ぎ手は誰かと訊き、啞然として、「八十のぢいさんがまだ稼いでるのかね。いつたい何の商賣してるのか」と云つたといふ。そのころ毎日新聞が父の日常を傳へた。近處の人々はそれを讀んでも、私と父と新聞とを結ぶことにはぼんやりしてゐた。茄子のをばさんは、「お宅の旦那はえらい先生だつて云ふけど本當かよ」と私に質問した。魚屋のおかみさんは當時ちぎれた鯛でも、とろとろした烏賊でも取りあひで賣れて行くなかに、盤臺をのぞいて小なまいきな注文をする私を、やみ小料理屋の姐さんと踏んだことから冗談を云ふやうになり、八十の年よりだから極いゝものをと云つたら、「當節おとつあんにいゝもの食はせるなんてはやらないよ」とませつかへした。新聞の話を聞いたと云つて、「ロケン先生つていふのはあ